

# GHQ／SCAP占領下の原爆表現

— CCD (民間検閲支隊) の検閲をめぐる —

岩崎 文人

1

連合国軍最高司令官総司令部 (GHQ／SCAP) が占領期間 (一九四五 (昭和二〇) 年八月～一九五二 (昭和二七) 年四月) を通じて言論の統制を行うことになる十カ条のプレスコード (「日本新聞遵則」へ日本出版法・Press Code for Japan) を発出したのは、四五年九月一九日のことであり、プレスコードを実際に運用し検閲に当たったのは、CCD (民間検閲支隊) であった。

この検閲に対して、原爆に関してとくに厳しかったという言説が一般に流布されてきた。たとえば、近年のものを上げただけでも、『近代文学』に発表する予定であったが、原子爆弾に関する記事の発表を禁止していたGHQ (連合軍総司令部) の検閲を考慮し、(注・「夏の花」の) 発表を差し控えた<sup>(注1)</sup>、あるいは「大田洋子自身も『山上』(『群像』五三年五月号) で明らかにしているように、アメリカ軍は『原爆』に関する作品や言説に対して厳しい『検閲』を行っていたのである。<sup>(注2)</sup>」などがある。わたし自身もほぼ同じよう

に述べてきた。<sup>(注3)</sup> 自己弁護は別にして、占領下の検閲の実態は極力秘匿されていたのである。CCDに配布された「雑誌及び定期刊行物ノ事前検閲二関スル手続」の第九条には、「訂正ハ常ニ必ず製作ノ組直シヲ以テナスベク、絶対ニ削除箇所ラインキニテ抹消シ、余白トシテノコシ、或ハソノ他ノ方法ヲ以テナスベカラズ。尚、ゲラ刷ヲ提出セル後ハ、当検閲部ノ承認ナキ追加又ハ変更ヲナスコトヲ得ズ」とあり、この条を補うものとして出版社に配布された注意書第一条には「削除を指令されたる場合は左の如き行為をせず必ず組み変え印刷すること 1、墨にて塗りつぶすこと 2、白紙をはること 3、○○○等にて埋めること 4、白くブランクにすること 5、頁を破り取ること」とあり、第六条には「ゲラ刷の＝□□×等の記号は出来得る範囲でこれを避けもし止むを得ず使用する場合には必ず真の意味する『仮名』又は『漢字』をもつて書き込むこと」とある。このように、検閲の実態は最初からその痕跡を隠し、秘匿されるようはかられていたのである。

よく知られているように、戦前特に満州事変勃発以降、内閣情報委員会 (のち内閣情報部となり、さらに情報局に拡大される) によ



「原子爆弾」「原爆」「ピカドン」「ピカ」「アトム」「原子沙漠(砂漠)」「焼野原(ヒロシマと推定できるもの)」「焼跡(同上)」「八月六日」「ヒロシマ」の語を含む文章(以下、便宜にヒロシマ言説と記す。ただし、学校沿革史等に記載されたもの、英会話用の対訳に現出したもの等を除く)は広島県雑誌四八一誌のうち三二三箇所/作品(編集後記等も一作品とする)であるが、そのうち、検閲により指摘を受けたもの(傍線、棒線、✓印などによるチェック)は、次にあげる二二箇所(年代順)である。

- 1 折坂多賀子「題名判読不能」〈詩〉〔新椿〕昭和21・7
- 2 藤原 □□「鯛」〈短歌〉〔溪流〕昭和21・8
- 3 山本 康夫「原子爆弾のころ」〈随筆〉〔瀬戸内海〕昭和21・8
- 4 吉村 忠義「広島戦災一週年記念を迎へる」〈随筆〉〔太玄〕昭和21・10
- 5 大矢 正巳「牝鶏時を告ぐ」〈随筆〉〔砂塵〕昭和21・12
- 6 松本人百次「川尻の一角」〈随筆〉〔黎明〕昭和22・1
- 7 春日 新「十三夜の月」〈小説〉〔砂陣〕昭和22・1
- 8 大田 洋子「青春の頁」〈小説〉〔新椿〕昭和22・3
- 9 桂木 千文「面影」〈随筆〉〔沼田川〕昭和22・4
- 10 田辺 節子「広島市を訪ねて」〈短歌〉〔燎原〕昭和22・4

11 益田 礼吉「チャンバレン曹長」〈短歌〉〔真樹〕昭和22・

6)

12 マック・ミラン「キリスト教と広島島の将来」〈随筆〉〔大広島〕昭和22・7)

13 福原 睦夫「無題」〈短歌〉〔一心〕昭和22・8)

14 竹友美代子「無題」〈短歌〉〔ひめかみ〕昭和22・9)

15 若瀬 遼「広島の記事」〈詩〉〔沼田川〕昭和22・11)

16 山下 利孝「犠牲者」〈小説〉〔沼田川〕昭和23・2)

17 小西 道善「知らない幸福」〈詩〉〔ユーカーリ〕昭和23・3)

18 柘井 迪夫「原爆特輯ジョン・ハースイの『広島』」〈論説〉〔ひろしま〕昭和23・6)

19 向井 正江「原爆当時に偲びて」〈短歌〉〔赤い屋根〕昭和23・12)

20 赤い灯「主張!!『公共の利益とは?』」〔橘〕昭和23・□)〈21〉

21 三輪 □一「無題」〈俳句〉〔中国電気工事労組機関紙〕昭和24・7)

このうち欄外に英文のコメントがあるものは(4)【Violation disturb public tranquility】<sup>7)</sup>(5)【判読不能】<sup>6)</sup>【判読不能】<sup>8)</sup>【A-bomb】【disastrous scene by bomb】<sup>9)</sup>【A-Bomb】<sup>12)</sup>【A-bomb】【Censorship】<sup>16)</sup>【Incitement to Unrest】<sup>17)</sup>【imperialistic】【判読不能】<sup>18)</sup>【reaction to Foreign article】【Imperial family】の九箇所である。

まず、(4) (5) (6) (9) (12) (18) の随筆(論説を含む)について検討しよう。(5) (6) は英文判読が不能であり、(18) は直接原爆言説にかかわるものではないので、ここでは、(4) (9) (12) について考察していく。(4) の吉村忠義「広島戦災一週年記念を迎へる」に対しては【Violation disturb public tranquility】(公共の安寧、秩序を乱す)とある。ガリ刷りのものであるので、すべてを翻字することはできないが、それは次のようなものである。ちなみに、プランゲ文庫、広島県雑誌全四八一誌のうち、印刷所による謄写版印刷あるいは活字印刷は二六三誌で、残りの二一八誌は素人の手になる謄写版印刷である。

戦に敗れた山河に季は巡りて、早や終戦一週年が来る。然し□□□□八月六日、これこそ広島市民にとつて恐怖と惨劇のどん底に突き落とされた□□世紀の□□と銘打つた原子爆弾が投下せられた一週年記念が来るのである。広島市では当日□□□□の追悼会やら色々な催がくり展げられることになって居るが、□□に原子爆弾の初めての犠牲者である□□□□に対し追悼し法要しても尚慰め足らざる気持が一杯である故に色々の形になつて催となるのであると思ふ。家に□□□□あの日あの時を想起する度に肌に□□を生じるのは、当時居合せた者万人が万人同様であろう。灼熱の閃光と強力な爆風——瞬時にして幾万の生命を□つた□□の一発の弾——私は思ふのである。世界中の□□□□当時の阿修羅の惨状□□□□現すだけが□□□□ないであらうことを——我々は哭もした。悲□□□□した。□□□□□□した。(一行判読不能)ではなかつ

たらうか? 原子爆弾の出現により世界に□□平和がやつと来たことは事実であるが、肉親を失い家を焼かれた広島市民には原子爆弾の出現が平和を(一行判読不能)供せられた不幸事か判断に迷ふのである。

被爆一年後、八月六日をふり返つたものである。ヒロシマ言説としては、「灼熱の閃光と強力な爆風」によつて「瞬時にして幾万の生命」が奪われ、街は「阿修羅の惨状」を呈していた、といったものであり、これらに対しての検閲指摘である。

英文の注記はないものの、検閲の指摘がある(3) 山本康夫「原子爆弾のころ」(昭和21・8)も同じく一年前を振り返つてのもので、さほどの表現上の差違はない。

はげしい空襲続きの疲労から原子爆弾の衝撃、子供の戦災死、そして敗戦、さらに何十年ぶりといはれる風害、水害と矢継ぎ早に責めさいなむ災禍はたしかに人間の考へを逸脱してゐた。

(中略)

私は原子爆弾でむごく焼け死んだ□□中生徒だつた子供の幻影追ひながら、わづかの暇を見つけて習字をした。

(中略)

子供を奪はれた胸のうづきは到底癒ゆべくもない。否むしろ年月と共に□□への恨みはとき澄まされてゆくやうである。その中にたゞ自分へささやく唯一の安らぎの言葉がある。

「原子爆弾で倒れた広島戦災死者こそ世界永遠の平和の使徒で

ある」と。

がしかし、こうした表現がすべて検閲の指摘を受けたかと言えは必ずしもそうではない。たとえば次のような例である。

ぼくがごはんをいただいてゐた時でした。おもての方をみた時に「びかつ」とひかつて、あつと思ふのといつしよに目の前がまつくらくなりました。「がちやつ」と大きな音がして、頭の上になにかおちてきて、ぼくはいきをするのもくるしくてたまらなく、口の中に土のやうなものはいつてもちがわるく「おかあさん。」とさげんでなきました。するとおとうさんが「しづかにしてをりなさい。」と、大きなこゑでいれました。「目をつぶつてゐるか、あけてはいけない。」といつて「あかるくなつたらすぐにげよう。」といはれました。「こどもはみないるか。」といはれたのでいちやん、ねえちやん、ぼくたちが大きなこゑで「はい。」と答へました。ぼくはうちがばくだんでやられたのかと思つてしんぱいしました。しばらくしてガラスまどのところが、うすあかるくなつたので、目をあけてびつくりしました。おとうさんとおかあちんおぢいちゃんはけがをしてちがたくさん出てゐました。ぼくはけがをしてゐませんでした。ぼくは、「おかあさん痛いですか。」といひました。おかあさんは、なにをかんがへておられたのかあちらこちらをみて、へんちがなく、だまつてゐました。

その時またおとうさんが「みんなけがはないか。」とたづねられましたので、みな「けがはしてゐません。」といひました。

おとうさんが「早く逃げよう。」とやねのかはらの上をあるいて出ました。出て見てびつくりしました。そとはまつ白くなつて家はみなつぶれてゐるのです。ぼくのおぢいさんは頭をひどくけがをしてゐました。そとではおやをたづねる子ども、子どもをたづねる人でおうさうどうです。比治山へ逃げました。それから江波の佐々木さんの家へあるいてきました。いくみちで馬が二ひきしんでゐました。橋の上やみちばたにもやけどや、けが人がたくさんゐました。またしんだ人がたくさんおられました。江波へいくまでに水どうの水の出てるところで、水のをんでついた時には、はらがへつて、足はいたく佐々木のをちさんが「よくきたねけががなくてよかつた。」といつてぼくの頭をなでてくださいました。(八月六日の思ひ出) 広島市比治山校初二 河村啓義<sup>(注)</sup>

被爆した子ども達(小中学生、高校生、大学生)の手記といえは、長田 新編の『原爆の子』(岩波書店、昭和26・10)が著名であるが、それらは、原爆手記の執筆という要請を受けてのものであり、自主的に書かれたというものではない。に対してここにあげた小学校二年の河村文は、特集が組まれたというものではない雑誌におそらく自主的に投稿されたものであるだけに貴重である。発表の時期といった点で言えば、山本康夫「原子爆弾のころ」が一九四六(昭和二一)年八月、河村文は、吉村忠義の「広島戦災一週年記念を迎える」の発表と同じ同年一〇月である。つまり、河村文は、被爆体験も生々しい翌年に書かれているのである。しかもここには、原爆被投下の瞬間、父母、祖父の負傷、家屋が倒壊した街の様子、

比治山さらに江波への避難行、途中で目撃した多くの負傷者・死者、馬の死体的確な描写があり迫真性がある。にもかかわらず河村文は何等の指摘も受けていないのである。

のちのことになるがこうした時間軸にそった八月六日を記したすぐれたものに、久城革自の「原爆下の警官達 地獄の街を往く」がある。この一文が掲載されたのは、「警察文化」(広島管区警察学校、大竹町(現大竹市)、昭和24・8)であるが、この雑誌は《原爆下の警官達》といった特集を組んでおり、ほかに「ピカドンこぼればなし」坂本ひろむ、「原爆の思出」平賀 繁が載っているがいずれも検閲による指摘は受けていない。

広島市役所内に設置されていた警察部防空本部の久城は、八月五日の真夜中の空襲警報下に部署につき、八月六日の朝を次のように迎える。長文になるが、資料的価値のことを考慮しあえて省略することなく引用することにする。

米来襲機は市の上空を旋回すること数十分のちその進路を光海軍工廠と覚しき西南方にとつてたちざつたので、関係本部員にやつと安堵の気持が訪れたのは八月六日午前三時三十六分頃の空襲警報解除発令の時であつたが警戒警報のまま待機することになり、当直員である私以下四人のものは、御互に来襲機に対する対策を研究してゐる間に、短い盛夏の夜も明け初めて東天遙かにほのぼのと白く染め出され、昨夜来の来襲によつて疲れてゐる□も、疲れてゐる□も、朝の冷い空気によつて生気が甦つて来る感じが体一杯に漲つてきた。□々たる朝の太陽は東天を昇りその旭

光を小窓より体一杯に受け、生気を取り戻さんとしてゐる時、中国軍管区司令部より警戒警報解除が発令されたのが丁度午前七時四十分頃であつたらう。室内のラヂオは県内に米機四機が上空を飛んでゐたがみんな退去して一機もあないと放送してゐたが当時警□課長寺岡春□より警察電話で警戒警報は解除されたが広島上空に米機の爆音を聞くから警戒を十分にするよう連絡があり、之が寺岡課長最後の言葉ならうとは誰が知つてゐたことか。その直前にラヂオ放送は広島県に進入した米機は広島県上空を南下しつつありとの情報を放送しつつあつたから南下途中にある米機の爆音と思料されるので注意警戒中であつた。午前八時十五分頃であつたらう、突然眼の前に青い閃光が「ピカツ」と光つたと思つた瞬間、且つて経験した事のない轟音を感じ乍ら無意識の内に机の下に□□したが□□何とも形容することの出来ない圧力を体に受けその圧迫感を抱いた□□人事不省に陥つてゐたのであらう(時間的には数分間位)はつと気がついて四辺を見ると一寸先も見えず全く暗黒と成つて居り自己が生きてゐるのか感じの上では、はつきり眼を開いてゐるにも不拘ず何物をも視界に反映せず自身自身生死を疑ひ吾身をつめつて痛みを感じたので未だ生あることを知り勇氣を出して危機を脱出すべく体を机の下より起し粉碎によつて私の体の上に後方の鉄の窓枠が覆ひかぶさつてゐる木材壁土其の他の破片を払除けて、出口と思れる方向に転げ乍ら出ようとして、地下室出口に行く途中誰人か判らないが誰か人が倒れてゐるのに、つまづいたので声を出してその人を呼んだが何等の答も得られないので先程の爆弾投下によつて爆死したものと思料し

其の儘に出口の方向へ足を運び乍ら、大声で、みんな元気か、如何してゐる、と互に暗黒の中に声を頼りに各々が近づいて見ると当時出勤してゐた雇員坂本千恵子以外今田、吉永、島田各雇員の姿は見えず唯声丈でその人を知るのみであつた（では視力が奪れてゐたのかと言ふと、そうではなくあとから考へた事であるが爆発による煤煙と強風による□灰によつて黒煙色の空気と成り太陽の光りをさへぎつてゐたものと思料される）互に元氣であつたことを喜び合つたが雇員坂本千恵子は重傷してゐるのを知つて他の三人と互に励し合い乍ら屋外へと避難しようとしたのであるが、地上も矢張り暗黒なものと重苦しい黒煙色の空気とで坂本千恵子は途中二回位倒れたのを救助し広島市役所前の電車筋の方向へ行つて見ると、付近に中学生らしい若者の声があるので其の学生に日赤病院に坂本雇員を連れて行つて貰ふよう依頼し、他の雇員の避難路を明示したのち更に引返し他の警防課員の消息を知るべく警防課に当てられてゐた地下室内に入ると、人の呻声があるのでその呻声を頼りに近づいてみると当時警防課勤務中の消防士補秋山光二氏であることが少々四辺が視界に開かれてゐたので判り、警務課勤務であつた岡本此平山田金光岡氏等に竹梯子にのせて救助を託し室内に入つたが同氏の形相は実に凄惨眼を覆ふものがあつた。

こののち、久城は県庁内の県防空本部に連絡に行き、負傷の程度が比較的軽かつた同僚と手分けし、廿日市大竹署、祇園可部署、海田市署に向かうことになる。久城は廿日市大竹署方面を担当する。鷹野橋から己斐巡查派出所まではたどりつくが、結局午後には市役

所に戻ることになる。その間目撃した市内の状況を久城は次のように書く。

当時の市内の状況は筆舌に尽し難く道路に小さい子供が蛇のよう叩きつけられ、白い半シヤツは、焼け焦げ虫の息である者、顔□から首筋にかけて皮が無惨にもはがれて呼吸は絶え／＼に成つてゐる母親をゆり起している可憐な子供の姿や、息絶えてゐる母親の屍体の乳房を吸い無心に道行く人を眺めてゐる子供の姿、或は遠くに近くに妻を呼び子を尋ねる又家屋の下敷きと成つてゐるのであらう□□で助けを求めるもの等、其の惨状を表す形容詞を見出すことが出来ないが、さながら阿鼻叫喚□□地獄の感があつた。

(9) の桂木千文「面影」は直接【A-Bomb】(原子爆弾)の指摘があるが、「多くの人命を奪つた原子爆弾に、夫の命は奪はれたのだつた」という一文に集約されるように、夫を喪つた妻の切々とした心情が述べられている。

思へば夫が亡くなつてもう早や二年……忘れ様にも忘れられぬ夫の面影……そつと胸に□めて今日迄押へてゐた感情がせきをきつた様に、□を波打たせてふるへる白い□□に、□□□□ある姿も□しかつた。泣いて／＼泣きつくした□□に、そつとほ、えみかける夫の□□□、(二行 判読不能)。

夫婦とは名のみ、□□□□□□□□ぬ間に、多くの人命を奪つ



の方に傾けて燃える焔の熱が頬に感じられた。ドドツと鈍い音をたてて家台が崩れるとバツと火勢があがつた。

ガタ／＼ガタと齒の根が合はない。身体が震へる。少し風が出たやうだ。ヒリヒリと背中と頬が疼く。耐えられぬほどの疼きに、明は己れの身体を見た。禪一枚の裸身を肩から、頭から腹から腕から、糸を引いて血が逼つてゐる。白い禪が半ば血で染つてゐた。キラキラ光るガラスの破片が刺つてゐる。大変な重傷に思はれた。同室の患者が三人程逃れて来た。

「寒いだらう？ 病衣を取つてきたら、右手の廊下から入ると、被服庫が開てゐるよ。直ぐ出せる」

それで急に彼は寒くなつた。これだけ焼けてゐればもう爆弾も落ちてこないと思ふと、病衣を取りにゆく氣になつて歩き出した。

患者、看護婦と、白いものづくめの病院は、全く悲惨な風景であつた。咽喉の肉がごつぱり割れた顔見知りの患者が壕の端で横になり、血染めの看護婦に強心剤を注射されてゐた。室長が、責任感ありげに同室の患者を呼び捜してゐた。その彼も亦、赤く血を浴びているのだつた。

「笠谷さん、やられたね。ちよつと、うちのガラス抜いて……」

兵庫出身の日赤の看護婦矢田が破れた看護衣から血に染つた二つの腕を伸して来た。大きな破片が二つ、ツブリと深く刺つてゐる。彼が破片を指先でつまむと矢田は、齒を喰ひしばつて横を向いて。

「早うしてえな」と急いだ。

思い切つてズバリと抜くと、案外平気で。

「見て、もうどこにも刺つとらへん？」

スカートを腰まで巻き上げ、それから看護衣の裂けた背中を見せた。

「もう無ささうだ」

「さう？ うち事務室にゐてやられてん、笠谷さんも刺つとるわ。取らうか？」

「いや、いいよ、俺で抜く」

興奮は容易におさまらなかつた。虞茶／＼にガラスの散つた傾いた廊下に入ると、ここだけはどうやら崩れないで残つてゐた。屋根の棟木が斜にかたむいて、今にも落ちさうに瓦が載つてゐる下を危ふい足どりで彼は被服庫に入り、病衣をとり出した。

山へ引き返す田圃の中の道で、彼は患者ならぬ、続々と逃げてくる避難者に逢つた。ベロリと頬の皮が顎でぶら下がり、或は足先、手先に経を下げたやうに皮の垂れ下つた老人、女、若者、子供の恐怖に戦く列だつた。何処でやられたのかモンペの紐だけ残つて殆んど裸身の若い女が目を白く腫らして、手を丁度幽霊の絵のそのやうに前に垂れてくる姿(編者注・ここまでがCCDによる指摘箇所)を見たとき、ハツとして折江を思つた。

この小説は、大田洋子の小説(8)「青春の頁」と描写の精密度、深度においてほぼ同質のものである。次に上げる「青春の頁」引用前半部分には【A-bomb】(原子爆弾)、後半のものには【disastrous scene by bomb】(原爆による悲惨な描写)の英文注記がある。

八月六日の朝、東京から七穂子の乗つて来た列車は、八時四十分が広島駅に着く筈だつた。そして二時間の延着のために、丁度その時間、七穂子は呉駅にさしか、つた列車のなかにゐた。

七穂子が呉市の焼野原に、眼を注いで暗澹とした感慨に陥つてゐたとき、(注。ここから以下指摘箇所)広島市は前代未聞の空襲のため、さかんな火の柱を街々の空に突きあげ燃え亡びてゐたのだつた。

乗客たちは、総立ちになつてひしめき、構内を埋めて蒼白になつた。群衆に交つて佇んだ七穂子の胸に、まったく反射的に、突きぬけて通つた最初の人の顔は瓏一であつた。どこからともなく、刻々に耳へ這入つてくる広島市の情報は、そこに住む人々を根こそぎ死へ誘つたかと思はれた。深沢の愛をよろこびを持つて受け入れた今となつても、なほ誰より先きに瓏一の安否を想ふ自分を七穂子はふしぎに思つた。(編者注・指摘箇所ここまで)

平生の通りだつたら、爆撃の中心地ちかく、市電で走つてゐる時刻であつた。深沢は燃える街をいくどか遠廻りで、地獄かと思へる壊滅の全市に耐え難い想ひを抱きながら、病院へ行つた。入り口の部厚な硝の二枚扉もばつたり倒れ、その下敷になつて呻いてゐる若い看護婦の頬が破れて、血の点がもはやみみずのやうに、かたまつてゐた。

負傷者は、あとからあとからと詰めかけ、長い廊下までうめつくしたその人々の間を血の匂ひが流れてゐた。

夕方であつた。街々はまだ燃えてゐた。火災を喰ひとめた作久

良病院の、骨組みだけになつた建物の二階まで深沢が順々に怪我人たちの手当をしながら上つて行つたとき、

「深沢かい？」

と誰かが声をかけた。聞き馴れた声のやうにも深沢は思つたけれども、誰がどこで呼んだのか、見当がつかかなかつた。

「僕だ。ここにゐるのだよ」

二度目の同じ声で、深沢ははつとした。原瓏一！ああ、だつたら声が変わつてゐる。

廊下の片隅、高い窓もこはれた下に、灰いろの襪襦がうづくまつたやうな恰好で、一人の青年が仰向けに、のびのびと寝てゐた。

深沢は近づいて、その青年のからだに掩ひかぶさるやうにし、顔を覗き込んだ。

「原か？」

さう念を押さなければ判らないくらい、瓏一の面ざしは変り果ててゐた。光線の火傷のために眼まで腫れつぶれた顔は、無気味な蒼ぐろい色を塗つたやうであつた。光線は全身を焼いてゐた。

「どこにゐたのだね」

深沢はすぐ聴診機を胸にあてて訊いた。心臓はすっかり弱つてゐる。

「八時に家を出て八丁堀まで電車で行つてゐたんだよ。広島駅へ行かうと思つてね」

「駅へ？」

「さうだ。七穂子に最後のわかれをするために。僕は電車ごとやられた。電車はテンピのやうに焼け焦げたよ。僕は入口に立つて

て、外へころがり落ちてね、倒れてゐた。そのときはこんなにすつかり僕のからだは焼けてゐたんだね」

「どうしてここまで来られたのかしら」

深沢は瓏一の手をしつかり握つて、やさしく云ひかけた。

「僕がむしやりに火をくぐつて、ここまで歩いて来たんだよ。君の治療を受けたいと思つたものだからね」

「なんにしてもひどくやられたものだ。でも死ぬんぢやないよ。僕は君を死なせない」

深沢の眼は充血して来た。

「ゆりえさんは？生きてゐるだらうか」

「わからない。多分生きてゐるだらう。だから君も生きなくてはならないよ」

「僕はもうなんにも要らない。水をくれ給へ。いまは水だけがほしい」

火傷の患者の誰でもが、口をそろへて、水、水と叫んでゐた。深沢はその人たちに、水をのませない方針をとつてゐたけれども、瓏一の容態がすでに最悪への道を辿つてゐることを知つて、水を取りに行かうとした。

深沢が死を控えた瓏一の中から離れて立つたとき、もう夜が来てゐた。

「先生。あたくしー」

深沢が振り向くやいなや、これも疲れ切つて頬の落ちた七穂子が、崩れるやうに深沢の硬い胸にぶつかつて来た。

「よく帰つてきてくれた。ありがたう」

思はず肩を引き寄せて、囁くやうに深沢は云つた。亡霊のやうに倒れてゐる瓏一を七穂子は深沢の肩ごしに見た。

七穂子はそれが誰であるかを気づかなかつた。

「菜穂子さん、原が来てますよ。あなた診ておやんなさいね」

深沢は七穂子の手で聴診機を渡した。そして後からそのからだを掴むやうにし、瓏一の傍へしやがませた。

街から街の死体のなかを通り抜けて来た菜穂子の眼に、瓏一の死に瀕した姿が、黒々と悲惨に写つた。この世の出来ごととは思へなかつた。烈しい衝動をうけた人が、すぐにはそれを感じるこゝとが出来ないやうに、七穂子はうつろであつた。

黙つて瓏一の黒い髪の毛を、そつと撫で、自分の頬を、相手の頬に寄せた。涙が止め度なく流れた。瓏一は七穂子の手を握つて離さなかつた。

深沢は□の上に両手を組んで、じつと二人の様子を見下してゐた。

検閲の指摘を受けたもう一つの小説春日 新の(7)「十三夜の月」は次のようなものである。

彼女の夫は二十七歳の若さを、(编者注・以下の一文指摘箇所) □の□の原子爆弾の犠牲にさ、げたのだつた、……私は、ある講演会で、日本は原子爆弾のために敗れたといつたやうなあるいわゆる有力者の意見に対して真向から反対した。……かりにあの時原子爆弾が用いられなかつたとして、□の攻撃を続けら

れていたら、現在残つてようやく日本復興の□地をなしておる中小都市が日ならずして悉く灰燼に帰し、そしてつとバカの頑張りをつづけていたら、農村の田も畑も焼き払われてしまつただろう。□□□□は一体どうして戦争を継続するのか。千九百四十五年七月二十五日あのポツダム宣言が発せられた時、戦争は既に百パーセント負けていたのだ。それを無謀にも愚かにも、□□頭に竹槍をもたせて頑張り〜と、さながら奴隷を鞭うつ如く鞭うつて、そしてあの世紀の愚□を招来した。……愚かしき戦争を継続して日本国民にあの犠牲を強いた責任者は一体どこへ行つた。広島の上空を原子爆弾を□□したB 29が悠々進行しておる時も、わざ〜警戒警報をまで解除した大馬鹿戦争責任者を追及しようともしない日本人の善良さを、世界の識者はどう思つてゐるのか。

(中略)

私は、ウラニウムで焼けたゞれて、ふためと見られぬ醜い相貌に変じ、次から次へと死んでいつたさんたる人達の姿を強く思い描いた。……彼女への激しい抱擁の衝動を消殺するために……

この一文の最後には原爆犠牲者の惨たらしい描写・説明もあるが、指摘箇所は原子爆弾投下に対する考え方に対してであり、他の二作品の指摘とはやや異なるが、「犠牲者」と「青春の頁」に対する検閲の姿勢に揺れない。とすれば、「原爆下の警官達 地獄の街を往く」をどのように考えればよいのか。

#### 4

短詩型文学についてみていこう。「詩」「短歌」「俳句」のなかで、英文注記があるのは小西道善の(17)「知らない幸福」であるが、それは次のようなものである。

お前は生れた

その日敵の空襲下であつた事も

懸命にお前を背負つて戦つた母に

乳房を慕つて泣いたことも

原子爆弾で艶れた父の焼香に

何がおかしいのか笑つて動かすもみぢの手に

母の熱い涙が流れたことも

何も知らないお前は幸福だ

お前は育つた

「父亡し児」のお前を抱いて

明日の糧を思ひわづらふ母の

淋しい悲壮な生活の流れを

巷に一片のパンを争つて滅びの一路を辿つたことを

熱血燃ゆる若人が愛機もろとも南海に花と散つたことを

ラヂオの前に陛下の玉音を拝聴して

国民が涙で敗戦を迎へたことを

この世ならぬ古き昔の御伽話として聞くだろう  
何も知らないお前は幸福だ

お前は大きくなった

兵士の行軍を知らず

勇ましい軍の歌も知らず

敵めしい軍艦も見えないお前は

やさしい進駐軍に「ハロー」と呼びかけ

調子よい平和の歌を口ずさみ

雲なき空に異国のまぶしき銀翼をあふぎ

街を征く軽快なジープに手を振り

港には色とりどりの世界の船が

貿易の汽笛なつかしく入つて来るのを見るであらう

あ、何も知らないお前ほど幸福な者はない

最初の傍線部二行には欄外に【imperialistic】と注記があり、後半二行にも同じように英文注記があるがこれは判読不能である。が内容からプレス・コード第五条「連合国軍隊の動向に関し、公式に記事解禁とならざる限り之を掲載し又は論議すべからず。」に違反するものとして指摘を受けたものであろう。CCDが天皇（に象徴される日本主義、帝国主義）および進駐軍に関する記事には特に神経質になっていたことがここで示されるが、事実、CCDに一九四六（昭和二二）年一月配布された「検閲指針」《削除又は掲載発行禁止の対象となるもの》に上げられた三〇項目に「SCAP —

連合国最高司令官（司令部）に対する批判」「占領軍兵士と日本女性の交渉」「占領軍隊に対する批判」「SCAPまたは地方軍政部に対する不適切な言及」「戦争擁護の宣伝」「神国日本の宣伝」「軍国主義の宣伝」「ナシヨナリズムの宣伝」「大東亜共栄圏の宣伝」等の項目はあるが原爆に関する表現は特立されてはいない。

英文注記はないものの検閲の指摘をうけた詩に、タイトルが判読できないが、「原爆」で「たつた一人の可愛い子」を喪った母の悲傷を形象化した（一）折坂多賀子の詩と「原子爆弾」によって「焼野が原」となった広島を記した（15）若瀬 遼「広島の記事」がある。

#### 題名判読不能

（二行判読不能）

あの子はもう帰つては来ない

あの子は誰の子でもない

私のたつた一人の可愛い子だ

誰があの子を□□□

（二行判読不能）

あの子の命は凄まじい

原爆の中に散つてしまつた

あの子が死んでも 誰も

□□になりはしなかつた

あの子は何処からか

私をじつとみつめてゐる

あの子はもう帰つては来ない

広島  
の記憶

わずか九ヶ月の

短い期間だったが

広島は矢張なつかしい

三年半前の広島……

原子爆弾で焼けたと聞いた時も

焼野が原と聞いた時も

町並の記憶はぐさぐさと

崩れたが

□広島を思ふ時

記憶の町並は浮ぶ

友達の便りに

家も沢山建つたと言ふ

新天地 革屋町 八丁堀 白鳥

変つてしまつたらうと思ひながら

矢張 三年半前の

広島  
の記憶の町並がある

「広島  
の記憶」は原爆の悲惨さがきわだつと  
いったものではないが、折坂多賀子の詩はたしかに子を喪つた母の悲傷が切々と読み手に伝わってくる、詩としてもすぐれたものといつてよい。が、「知らない幸福」の原爆言説は何故通過しているの  
であらうか。また次

のよ  
うな  
検閲  
の指  
摘の  
ない  
詩と  
どの  
よ  
うな  
徑庭  
があ  
ると  
い  
うの  
であ  
らう  
か。

広島  
の一  
本  
の  
老  
樹  
の  
下  
に  
て 兼清農夫

一  
本  
の  
老  
樹  
が

空  
を  
切  
つ  
て  
ゐ  
る  
城  
跡  
は

焼  
跡

う  
ら  
み  
の  
こ  
れ  
る  
こ  
の  
ま  
ち  
の

ふ  
る  
き  
歴  
史  
の  
こ  
ま  
よ

あ  
ら  
た  
に  
回  
れ

瓦  
礫  
が  
と  
り  
の  
ぞ  
か  
れ

む  
か  
し  
の  
土  
と  
や  
け  
た  
土  
と

掘  
り  
か  
へ  
さ  
れ  
た  
土  
の  
う  
へ  
に

た  
て  
ら  
れ  
た  
ま  
つ  
ち  
箱  
の  
や  
う  
な

簡  
易  
住  
宅  
よ

あ  
の  
と  
き  
ば  
ら  
ば  
ら  
に

ち  
つ  
た  
手  
、  
足  
、  
頭  
は

そ  
の  
ま  
ま  
よ  
せ  
あ  
つ  
め  
て  
は  
な  
ら  
ぬ

原  
子  
砂  
漠  
の  
七  
つ  
の  
川  
に  
は

空がうつり

雲がゆく

ジャンルこそ異なるものの、下村 醇の小説「父かへる」<sup>(註9)</sup>は子と妻を喪った心情を記して哀切きわまりない。

空腹も感じない。彼は思ひ出した様に立上つて木片を拾つてその焼跡の土を掘り返へし始めた。瓦の下から焼け残つた子供の靴が片足出て来た。子供のものだ。勲夫のだ。そう思ふと胸がグツト熱くなつて来る。あの子がもうこんな靴を履く様になつてゐたのかと果しなく、思ひが走る。続いて出征前妻に買つて与へたコンパクトが押し潰されて出て来た。土を振り落とすと金色の懐しい見覚へのある品である。無理にこじあけると、甘いくすぐる様な香が、妻の体臭を思ひ出させる香が強く鼻を刺戟した。半分壊れた鏡に澄んだ秋空の碧さが映つてゐた。

折坂の詩が子を喪つた母の哀切きわまりない悲傷を詠つたものとして検閲の指摘を受けたとすれば、下村 醇の「父かへる」をどう考えればよいのか。

最後に検閲の指摘を受けた短歌について考察しておこう。ここではそのすべてを引用することとする。

原子爆弾にたをれし父の面知らぬ吾子は□□□□笑み初めにけり

藤原 □□

まざまざと記憶蘇る死の街にふたたびを来て人を診療す

田辺 節子

原子症にうごめく人をみとりたる袋町小学校の門に来て佇つ  
原子弾に死にし子をわが語り出れば所在なきがに面を曇らす

益田 礼吉

原子爆弾に斃れし畏友を偲びて  
珠盤とりて唖閉づれば亡き畏友の事を偲ばれ悲しくもある

福原 睦夫

原爆の巷に逝きて早や三年亡き弟の魂はいづくに

竹友美代子

天を巻き／焰の空の寄せ来るを／なだれの如く人人逃ぐる  
原爆の／落ちし直後の真暗き／中におののく妹を抱く

息つまる如き／黒煙のうすれ去り真黒き／灰を吾がはきだしぬ  
火が移る／逃げると叫ぶ人の中に／焼けただれし背に血の吹き  
出ずるもあり

防火水槽の／中に黒くこげ居りし／死体の三個抱き合い居き

向井 正江

俳句で指摘を受けたのは三輪□□の次のようなものである。

春雨や原子の原に三味の音

原爆の原にも同じ蟬の声

これらとて、たとえば次に上げる深川宗俊の「焦熱の街路」と題された一連の短歌<sup>(註10)</sup>とどのような連いがあるのであるだろうか。

爆発音につづきて紅蓮の焰とも見ゆる視界は一瞬なりき  
爆死かと思う瞬間にして生きよという意識ががちぬ崩れゆく中になまぐさき血の香漂よう救護所に君が手ひきて吾も立つなり  
黒き雨降りくれば油なりと言ひ叫び一瞬ざわめく傷つきし群衆  
余りにも四囲悲惨なれば人心はずでにおびゆる黒き雨にも  
もろもろの色をふくめて燃えつつく我が故郷にただ掌を合す  
軍閥への憎しみたぎれ怒り燃えよああ崩れゆく呪われし街  
悽愴と言えどつきくる憤りこみあぐれば燃えゆく空を凝視す  
火煙はすでに全市を覆いつくす夜をつぎて逆巻く紅蓮の焰  
へし折れし鉄骨もあり電線をまたげくぐりてわゆく焦熱の街路  
あふれくる涙とめどなく流るるよ屍まるぶ街を歩めば  
うづ高く燃えはじける音よ米麦の倉庫の外壁いま崩れ落つ  
一瞬に壊え崩れたるビル<sup>(註11)</sup>の角日陰もとめておろおろする少女  
真夏日の直射は焼痕にうづくらし日陰日陰よと声切なくて  
焦土に今はもの言う気力さえなくて眼うつろにうづくまる群れ  
焦熱の道逃れ這う女あり裸体はさらす真夏日のもと  
焼けただれし裸体は少女よ日輪を抱くがごとく天に叫ぶも

こうしてたどつてくると、ヒロシマ言説に対して、たしかに、C Dは、いくつかの指摘はしているが、全体の中ではあくまでも一部であると言うことである。客観的に、ヒロシマ言説をトータルに考察すれば、従来言われていたほど「厳しく」はなく、少なくとも、「禁じられた」という語がイメージさせるようなものではなかったといえよう。C Dが行った検閲は、一九四七（昭和二二）年一二月一五日以降、極右極左二八誌をのぞく全雑誌が事後検閲となる。ちなみに、C Dがその役目を終え、解散するのは一九四九年末である（堀場清子『禁じられた原爆体験』）。こうした動向が検閲の実態に影響を与えているかどうか、という点が当然問題となる。断定的なことは勿論言えないが、広島県雑誌四八一誌で見えるかぎり、ヒロシマ言説に対して、その前後において特別の変化はないようである。

と同時に、つけ加えておきたいのは、先に示したように、検閲は、原爆言説に対してよりも、天皇制、米國・進駐軍に対する言説により厳密でナーバスであったと言うことである。（ヒロシマ言説を含めた検閲の全実態については、すでに「GHQ/CCDへ民間検閲支隊」による検閲の実態―プランゲ文庫広島県雑誌226誌の場合―（岩崎文人・植木研介・宇吹 暁・榎林滉二、平成16・3）において、広島県雑誌の約半分の調査を終えているが、二〇〇八（平成二〇）年三月には、そのすべてを終える予定である。）

検閲の実態は今後さらに明らかになっていくであろうが、どのような資料をもとに言及するかによつて、主張点が異なる、ということにとくに注意しなければならない。つまり、検閲の指摘を受けて

いる部分を抽出しそれを強調するか、指摘を受けていないものを根拠として論じるかによって、導かれる結論が異なるということである。ただし、重要なものは、検閲の実態がいかなるものであるうとも、戦後の一時期、GHQ/SCAPの占領下時代、検閲が行われ、表現の自由が抑圧されていたという事実である。

本稿は、文部科学省科学研究助成「課題番号17520116」に基づいたものである。  
(広島大学)

注1 島田昭男編「年譜——原民喜」(『原民喜戦後全小説上』講談社

文芸文庫、平成7・7)

注2 黒古一夫「作家案内——大田洋子」(『屍の街・半人間』講談社

文芸文庫、平成7・7)

注3 たとえば、『原民喜——人と文学』(勉誠出版、平成15・8)等。

注4 上林 暁「伏字」(『文芸』昭和二九年四月号)

注5 木下尚江「火の柱」(改造社版「現代日本文学全集 第三十九

卷」所収 昭和五年九月)

注6 本稿は、岩崎文人編『ヒロシマはどのように描かれ、どのように語られたか——GHQ/SCAP占領下の原爆表現——』(平成19・8)に基づく。なお、翻字にあたって、判読不能の文字

は□印で示し、数行にわたる部分等はその旨記した。

注7 「ギンノスズー・二ネンノトモ」10(昭和21・10)

注8 「暁笛」第2・3合併号(昭和21・7)

注9 「新生」第十五号(昭和23・11)

注10 「スパイア」四月号(昭和24・4)